

台頭し、注目されるからである。

最後に外国語ができることは、頭の良し悪しに関係ないと肝に命じるべきで、できなくても悲観する必要はない。ただ、外国語をマスターすると世界が広がり、知識が深まる。そして、マスターした人は、そうでない人と比べて、新しいモノへの好奇心が強く活動的、未知への興味が強く理知的、我慢強さの「3強」を兼ね備えていると見られるだろう。

外国語の勉強は「話すこと」から

現代中国学部
劉 柏林

言語には口語と書面語という二つの形がある。口語は書面語の基礎でもあり、人類のコミュニケーションの重要な手段でもある。日常生活では口語が書面語よりよく使われ、人間社会に欠かせないものである。しかし、外国語を勉強する人は口語より書面語に力を入れる人が多い。なぜかというと言語は口語より発音の正確さが要求されないし、作文を書く時にゆっくり考えながら書けばよいからである。それに、教育機関では外国語の実力評価は筆記試験で評価することが多い。それで書面語を重視し、口語を軽視するという現象が表れたのである。これはもちろん外国語教育の基本方針と教育者の教え方にも関わっていることである。

私はよく学生に「どの国の言葉がやさしいですか」、「中国語は本当にむずかしいね」と言われるたびに「母国語の以外の言葉はみな難しいですよ、みなさんにとっての中国語ももちろんのこと

です。難しくなければ、大学に入って勉強する必要はないのではないですか」と答えている。確かに外国語は容易に身につくものではなく、時間をかけて勉強しなければ、上達するものではない。中国では外国語教育の基本は「聞く、話す、読む、書く、訳す」ことである。外国語をマスターするには良い環境（客観的要素）と自分自身の努力（主観的要素）が必要である。むしろ、後者のほうが重要であると言えよう。中国語には「有志者事竟成」（志さえあれば必ず成功する）という諺があるが、私は外国語を勉強する過程において、これを痛感している。志と自信がなければ、語学に限らず、他の事もマスターできない。「習っている外国語を必ず身に付けるという意志を持つことが大事だと思う。

私は外国語を勉強する以上、発音は勿論のこと、会話をきちんとやらなければならないと思う。外国語を習得する際、聞くことと話すことは最も基本である。一般的に自分の勉強している外国語が正しく聞き取れるなら、その言葉の発音を真似することができ、文章も一応読めるのである。これらは相互補完の関係にある。中国語を母国語とする人が日本語を習う場合として、日本語を母国語とする人が中国語を習う場合も、最初に正しく練習することが大変大事である。最初の発音をしっかりマスターしておかないと、後々勉強に支障が出てくる。始めに覚えた変な発音はあとから直そうとしても、一度ついてしまった癖はなかなか直らない。だから、発音の基礎を固めることは外国語学習の第一歩である。初心者にとって、日本語の「長音」「濁音」「促音」「拗長音」はわりあい難しいと思う。中国語の標準語にはそういう音素がないからである。中国の四川、湖南、陝西、福建省など長江沿岸地域出身の人は始めのうち、日本語の「な」と「ら」がうまく区別できない人が多く、ずいぶん苦労する。これはその地域の発音の特徴が影響しているようだ。私の体験からいうと日本語を習いだして最初の一ヶ月間は、先生やネイティブスピーカーの模範的な発音テープを繰り返し聞きながら、その発音を何回も

真似し、発音の要領が少し分かったら、恥ずかしがらずに自分で発音をして先生や先輩に聞いてもらい、直してもらうことが外国語を勉強する近道である。(私の学生時代、テープレコーターは、高嶺の花であった。外国語大学は恵まれたほうで、各クラスに音質のあまり良くないテープレコーターが一台置かれ、学生たちは毎日それを囲んで授業用のテープを聞いていた。今は中国の学生にしても、日本の学生にしても、テープレコーターはもちろんのこと、いろいろな録音教材がたくさんあり、本当に幸せである。)

「聞く」と「話す」練習をすることは学生の語学センスをみがくの一番重要である。聞くことは話すことの基礎であり、よく聞いてこそ、初めてよく話せる。聞くことはただ脳の聴覚を機械的に刺激するだけではなく、耳で音を聞くことを通して、話された内容に対する理解、記憶、分析、判断など脳を働かせることが含まれている。聞き取る速度および正確さには人の理解力と知識の広さが反映される。だから、私は外国語を教育するにしろ、勉強するにしろ、「聞くこと」と「話すこと」から、着手すべきであると思う。

私は大学時代に毎朝録音テープを2回ほど聞きながら、大きな声でその発音の真似をし、新しい単語と本文を覚え、それから通常の講義に出て、夕食後、授業の内容を復習してから、クラスメートと日本語で会話の練習をした。相手のミスに気が付いたら、お互いに直しあう。このようにして会話を進めていく。塵も積もれば山となる。こうしたことが私の外国語の学習法であり、みなさんのご参考になれば幸いである。



より良い外国語の授業をめざして

経営学部

島田 了

学生の皆さんはもうご存知でしょうか、愛知大学は2001年度から「FD活動」を全学で始めています。「FD活動」とは、「大学の学部教員の教育および研究を開発・発展させるための活動」ですが、なかでももっとも重要と思われるものが、学生にとっていかに魅力的なそして役に立つ講義をするかということです。

それと平行して名古屋語学教育研究室でも、外国語を担当する教員の間で情報の交換をおこない、よりよい語学の授業を目指していくことになりました。その第1回目の集まりが6月22日にあり、そこで活発な意見の交換がおこなわれましたので、その結果を簡単に報告したいと思います。

やはりほとんどの教員が指摘したのは1クラスの人数の問題でした。法学部・経営学部対象の大人数の授業では個人個人の指導がなかなか出来ない、学生との距離が縮まらないといった声が圧倒的でした。クラスの人数は、現在準備中の新しいカリキュラムの導入などにより改善を図るよう努力していますが、現在の条件のもとですぐにできる有効な方法として、座席を指定することによって学生一人一人の名前を把握するようにする、また必ず一人一回はあてるなど、授業に参加しているという自覚が持てるように指名の方法を工夫している等の報告がありました。

学生の声が小さいので発音の指導が難しいという悩みに対して、グループ学習をさせて、クラスの他の学生との人間関係を作らせることによって対応しているという報告もありました。その他各